青年学校における塾風教育に関する一考察

－高知県檮原村立孝山塾について－

三羽光彦（さんぱ）

研究課題

1920-30 年代には、全国的にしばしばいわゆる塾の形式で青年教育が実施された。私的な教育機関だけでなく、実業補習学校や青年学校など公教育制度のなかで行うものも多く見られた。その一つが高知県の檮原（ゆすはら）村立孝山（こうざん）塾青年学校である。しかし、この孝山塾については、協調会編『農村に於ける塾風教育』（協調会、1934 年）などに掲載されておらず、これまで教育史研究の俎上には上がってこなかった。そこで本論文では、この孝山塾を創設した村当局の構想、その教育理念および、この塾風青年教育の意義について考察することにした。

塾風教育は 1920-30 年代に一世を風靡し、1934 年に協調会が『農村に於ける塾風教育』（前年発行の『農村に於ける特色ある教育機関』を改訂）を出版した。ここには全国 50 か所ほどの農村の小規模な教育機関が掲載されており、塾風教育という語は、このとき一般に広がったとされている。当時、独自の教育理念を持った指導者による少人数の農村教育機関を「村塾」などと呼び、「師弟同行」の理念のもと寮生活などによる教育・訓練を行い、教育界において注目されるようになっていた。協調会はこうした教育を塾風教育として紹介したのであった。しかしその明確な定義はなされておらず、従来の学校教育を批判的に乗り越えようとする小規模な特色ある農村青年教育といった程度の捉え方がなされているにすぎない。しかし特徴的なことは、それらが共通して近代学校教育の欠陥を克服しようとするものとして位置づけられていることである。

そこでは近代教育の欠陥として、「画一的にして都市風教育に泥み、智識の伝達に偏して人間を作らず、労働忌避、向都離村の弊風を馴致」したことなどをあげ、それを克服するために、「農の本義を知らしめ、確固たる人生観を与え、農村に居ついて農業を楽しみ、先ず着実に一家郷村の改善繁栄に力を致し、更に進んでは地方国家の福祉実現に参加せんことを志す所謂農村中堅人物」[1] の養成を目的としているのが、農村における塾風教育機関にほぼ共通する性格であるとしている。

小野武夫『村塾教育の時代的使命』（1934 年）では、「村塾」とよぶ農村塾風教育の勃興について、第一に、近代日本の教育への「画一的であり、形式主義に偏して」いるとの批判のなか、デンマークの国民高等学校の教育思想が紹介されたことによって、政府の奨励によらずいわば「自然発生的」[2] に生まれた運動であると評している。また、第二に、近代日本の教育から宗教性が排除されたことへの対処として、塾風教育の形で、「クリスト教を、或いは仏教を、或いは神道を其思想的背景として採用」[3] して、徳育による教育的効果を図ろうとしている点が特徴的であると分析している。いわば、塾風教育は客観的には、近代日本の教育制度における「内在的欠陥の自覚」[4] によって生み出されたというのである。

こうした塾風教育は歴史上どのように評価されているのだろうか。第二次大戦後においては一般的にネガティブに評価されることが多かった。「資本主義の農村浸透を阻止し、（略）封建遺制を維持しようとする主張にもとづくものにほかならない」[5] と、近代化の流れに逆行する反動的なものとみなし、「その主情主義・農本主義は、（略）国体思想と癒着して、第二次大戦にいたる間の日本のファシズムの培地ともなった」[6]

などと、農村におけるファシズム形成に影響を与えたものと評価する傾向が強い。しかしながら、すべての教育機関が戦争協力を余儀なくされたのがこの時代であるとすれば、軍国主義や国の大陸政策への協力が塾風教育機関にのみ特別固有な意味をもったとはいえない。むしろ、塾風教育がもっぱら農村青年教育として簇生した背景や要因に眼を向ける必要あろう。

ところで浜田陽太郎はこうした塾風教育機関をつぶさに分析した上で、「こうした塾的な教育は、その第一が人と人との接触による感化であり、強烈な個性がその魅力の最大のものであった。ある意味ではそれは教育というものの原初形態であり、本質的なものをもっていた」[7] と指摘している。こうした観点から戦前日本の「塾風教育」について論じたのが、宮坂広作「日本農本主義の教育：思想と実践」である。戦前期の「塾風教育」の簇生を教育運動の一種と把握し、その諸流派と思想的系譜を分析して、「天皇制ファシズムを志向したもの、あるいは帝国主義的大陸侵略の担い手などと、過酷な批判の対象となってしかるべき性格を持っていたことは明らかである。しかし、その思想と行動の中には、近代の論理をのりこえようとする要素があり、それはしばしば古神道への憧憬や前近代的共同体への志向といった復古的な、うしろ向きのスタイルをとったが、その主張の中には現代的な意味を持つものがある」[8] と論じている。「塾風教育」は近代公教育とは異なる性格を有し、「近代の論理」をのりこえる「現代的」意義をもっていると評価しているのである。「近代の論理」をのりこえようとした塾風教育の有していた要素、その教育史的意義とは何であったろうか。以下、檮原村の孝山塾を例にその点を考察することにする。

Ⅰ．檮原村と教化村指定

１．津野山文化と檮原村

高知県高岡郡檮原は、須崎市の北西、愛媛県との県境近く、四国山地に抱かれた山村である。この地は、藤原基経の後裔の藤原経高（津野氏の祖）が開拓したと語り継がれ、古くから津野山郷と称された。俗に「土佐のチベット」といわれ、高知県には珍しく毎年積雪を見る山間部であるが、南北朝の往時、五山文学の双璧であった義堂周信、絶海中津の 2 人を生んだ（津野町）由緒ある土地柄で[9]、大洲や宇和島に近く、土佐にありながら西伊予とつながり、独自の民俗・文化を育んできた。龍馬脱藩の街道を取材し檮原を訪れた司馬遼太郎は、「檮原は､ほとんど桃源郷ともいっていいような僻地でありながら、教養の伝統がある。幕末、そういう小さな地域から何人もの志士をだし、ほとんどが非業にたおれた。（中略）それに、檮原の人情も言葉づかいもしっとりとしていて、むしろ県の平野地方より上品な感じもうける」[10] と述べている。

1889 年 4 月、町村制施行により西津野村が発足、その後 1912 年に村名を檮原村とし、1966 年に町制を施行した。明治以降、町村域の変化のない珍しい自治体である。1928 年に村営水力発電所を設置し、後にそれを県に売却して得た資金で広大な村有林を取得するなど、村の財政は比較的潤沢であったが[11]、1930 年代には負債総額が貯蓄総額を大きく上回っていた[12]。1935 年 7 月の調査によると、檮原村の人口は 9,888 人（男 5,092 人・女 4,796 人）で戸数は 2,043 戸、そのうち農業は 1,682 戸、商業が 145 戸、工業が 58 戸であった。産業出荷額としては林業が農業をしのぎ、生産品は米のほか、特産物として和紙の原料としての三椏（みつまた）があり、また椎茸、木炭などがあった。維新後の廃仏毀釈が徹底された影響で村内には寺院が 3 か寺しかなく、あとは神社が 20 社とある[13]。

檮原村の「民風」については、「温和にして質朴の風あり、勤勉にして節約質素なり敬信崇祖の念篤し、長上先輩を敬愛す尚武の気風に富む、祭祀古典を重ず、男子着袴の風、隣保扶助の風、納税義務観念篤し、

共同一致の精神、青年思想堅実。」といった点を長所にあげ、「自治の観念に乏し、部落的偏見、依頼心強し、盲従雷同の弊、権利思想に乏し、感情に走り理性に乏し、進取の気性に乏し、因習旧慣に囚はれ易し、時間重せざること、公徳欠乏。[14]」を欠点として指摘している。村内は、百戸余りの檮原中心部の本村を中心として、他は数十戸程度の 52 の集落（部落・字）からなりたっている。部落間の対立意識も強かったようである。小学校は当時、尋常小学校が 6 校、尋常高等小学校が 3 校あり、各校に青年学校が付設されていた。現在は人口 3,600 人ほど（2017 年年現在）であるが、1930 年の国勢調査では 8,728 人であった[15]。

２．教化村の指定

1932 年 5 月、中越（なかごし）義幸（1894－1978）が村会の推薦を受けて村長に就任した。前助役の森山宗晴は留任し中越村長の右腕となった[16]。この村長・助役は農業恐慌の困難な時代に檮原村のリーダーとして村を引っ張っていった。時あたかも農山漁村経済更生運動が進められる時期であった。この運動は、農民の自力更生をスローガンに、農業恐慌を克服するために地域経済の計画的組織化を進めようとした政府による官制運動であった。1932 年より、政府は、毎年 1,000 町村を経済更生町村に指定し、 1 町村当り 100 円の補助金を支出することとした。指定村では、各町村の有力者を網羅した経済更生委員会をつくらせ、土地の分配・利用の合理化、農村金融・農業経営の改善、経費節減、生産物の販売統制、生活改善などの更生計画を立てさせ。農業の生産・流通の合理化と、農民の精神主義的教化とによって恐慌を克服しようとした。1940 年までに全国の 81％の町村が指定され、後の皇国農村確立運動へと引き継がれていった。

1932 年、高知県は檮原村を県内 5 か村の経済更生指定村のうちの一つに選定した。更生運動では町村教化の側面が重視されており、各府県では指導者講習会が実施された。そうしたなかでさらに、檮原村は中央教化団体連合会から 1935 年度の教化村の指定を受けた[17]。これは同会の教化町村事業の 2 回目で、 1 回目（1933 年 11 月の 1934 年度指定）の 7 県 36 町村の指定に続く 1935 年 8 月の 11 県 63 町村の指定であった[18]。このなかに高知県も含まれ、檮原村を含む経済更生指定村 5 か村がともに教化村に指定された。

中央教化団体連合会は 1923 年 11 月の国民精神作興に関する詔書の発布を契機として、聖旨の普及・徹底のために発足した教化団体連合会をその前身としている。その後、府県ごとの教化連合団体を結成し、これらを統一して 1928 年 4 月に中央教化団体連合会（財団法人）となった。1930 年、植民地の教化団体をも網羅し、毎年、教化事業関係代表者大会、各種の講習会、講演会、協議会、懇話会を開催したほか、1933 年からは教化町村の指定、教化功労者の選奨、教化網の整備などを行なった[19]。

３．教化村の実施計画

教化村の指定は、1933 年 11 月に中央教化団体連合会に天皇の御内帑金が下賜されたことから、同連合会によって実施され全国的な教化運動の一環として始まった。中央教化団体連合会は政府の機関ではないが、政府の指示による官制運動の最高指導機関として活動したのであった。教化町村指導要綱によると、その目的は、「皇国精神に立脚したる精神生活、物質生活融合の理想に基き、郷土の実情に即したる全一的教化施設により愛国愛郷心の喚起、良風の振作、産業の開発、経済の調整、自治の向上等町村生活の全面的更生発展を図り、以て全町村一円融合の理想郷を建設せしめ、之を永遠に確保せしめんとするにあり[20]」となっている。教化町村指定については、教化町村設定を計画し府県費で予算計上している府県を選定し、その府県に 5 か町村を標準として指定町村を定めることを委ねていた。地理的・産業的に偏らない選定を配慮するとしているが、最も重視されているのが「熱心真摯なる指導者の有無[21]」であった。要綱では、「先ず町村長、小学校長の意向を聞き然る後、町村幹部一致の決意を確め[22]」て決定するとされている。

教化町村の行う必須の事柄としては、恒久的中枢機関の設定と部落常会の開催であった。前者は、各種団体の代表や個人を社会教育委員や教化委員として組織することとし、その活動内容として以下の事項を列挙している。「イ、町村経営の基礎調査　ロ、町是、村憲の設定　ハ、振興計画の樹立　ニ、年中行事表（教化暦）の編制　ホ、町村報の発行　ヘ、全町村民慣行事項の協定　ト、町村常会の開催　チ、部落並家庭常会の開催及び奨励、指導　リ、教化強調運動実施　ヌ、中堅人物養成訓練の施設　ル、町村及各部落に於ける教化道場の設置[23]」。このうち、中堅人物の養成訓練と教化道場の設置は、各教化町村の青年教育の在り方に大きな影響を与えた。檮原村が 1934 年 11 月、青年訓練の徹底を期するため、移転改築後の旧村役場を活用して孝山塾と称する青年訓練道場を設立することとしたのも、こうした教化村の政策動向を背景としていた。

Ⅱ．中越義幸村長と檮原村振興計画

１．中越義幸村長

檮原村が教化村に指定されたのは、中越義幸村長の存在が大きかった。中越義幸は 1894 年、西津野村越知面（おちめん）上本村（現・檮原町越知面）に生まれ、高知県立農林学校を卒業後、檮原村役場に勤務した。その後、信用組合理事、村会議員（1921-22）、農会技手などを歴任し、県会議員（1927-42）に当選、茨木村長（1932-41）の時代には県議と助役を兼任した。1932 年、茨木村長退任にともない檮原村長となり、孝山塾の設立（初代校長）、教化村の実施などに取り組み、村長、県会議員を各 3 期勤めた。その後、高知県の大政翼賛会の組織部長、事務局長となり、1942 年 4 月の総選挙では、翼賛政治体制協議会推薦によって衆議院議員（1942-45）に当選した。戦中から戦後は高知市に居を移し高知市会議員（1942-46）となり、また戦後初の公選制の県教育委員に当選し、その後、高知銀行支店長、製紙会社社長などを歴任して、1978 年 83 歳で死去した[24]。中越は、戦前戦後を通じて檮原村と県あるいは国との有力なパイプ役となっていたのであった。

中越村長は、「更生計画の基本は、産業と教育と自治の三位一体」であるとして、以下のような村是を作り、村の更生計画を進めた。「教育勅語の聖旨を奉体し詔書の精神を遵守実践し村自治と教育と産業の三位一体渾然融合に依り生々発展の理想郷檮原村を建設せんとす。[25]」。そして振興計画として以下の 9 点を掲げた。「1、指導者修養　2、教化と経済の連絡融合　3、村財政の調整強化　4、負債整理　5、各種産業の振興と販売購買の統制　6、有蓄農業徹底　7、中堅農民養成　8、村民保健施設の充実　9、部落常会の徹底的指導[26]」。

２．中堅農民養成機関の構想

中越村長は、指導者の養成については報徳思想をもってした。報徳社本社に村から毎年 5 名の青年を派遣して、報徳の教えを学ばせ檮原報徳社を結成し、各部落の常会を村報徳社の支部とし、主要な部落会の当夜は報徳会を開催した。教化と経済の連携を図るため、村の小学校（青年学校を併設）各校に農業専任教員をそれぞれ 1 人おき、農会の技手を兼任させ、産業と教育の一体化を図った。「林業思想の涵養」と「村基本財産に対する認識修養[27]」を目的として、小学校各校と青年学校に「練習林」を設置し、それを村有林として村財政の基盤確立も目指した。そしてさらにそうした施策を展開するなかで、中堅農民養成のための教育訓練機関を設立することとした。

かねてより中越義幸は、加藤完治（1884-1967）による日本国民高等学校を理想の青年教育機関としてみていた。そこで、同様の塾風教育を実施していた香川県立農事講習所（仲多度郡榎内村）に指導者の教育を願い出るとともに、青年教育に造詣の深い指導者の推薦を高知県学務課（片岡一亀県視学）に求めた。県から推薦された指導者は2人あったが、そのうちの1人が岡林廣喜代であった。岡林の記録によると、1934年3月31日付で、県から檮原村への赴任の内示を受けている[28]。

片岡一亀はかつて農業補習学校教員養成所主任をしており、岡林が養成所の生徒であった時からの旧知の仲であった。片岡は岡林の青年教育に対する熱意を記憶していた。「君はいつか、城東中学（今の追手前高）の講堂で、働きつつ学ぶ青年学校の話をしたが、今度檮原で、その通りの学校が出来るのだが、君より外に適任者がない。是非行ってほしい[29]」と岡林を説得した。岡林はその場で承諾した。家族は反対したが彼の決意は崩れなかった。4月、トラックを借りて檮原に赴任した。その時のことを「北海道へ行った時よりも、なお遠くへ来た感じがした[30]」と回想している。

Ⅲ．孝山塾と香川県立農事講習所

１．横尾惣三郎の「自給自足の農民道場」論

中越村長は、すぐに開設するのでなくその十分な準備が必要と考え、岡林を5月から7月まで香川県立農事講習所に学ばせた。この農事講習所は、1929年4月に香川県内政部長であった横尾惣三郎（1887-1961）の発案で設置された塾風教育機関であった。横尾は、すでに1923年8月に、愛知県内政部農務課長の時期に、愛知県岡崎市美合町に愛知県種畜場を設置していた。その教育目的は、「農村の中堅となり、農業に従事する堅実なる青年の養成」とある。教育方針は「皇国農民の立場を自覚せしむる」こととし、そのために以下の3点を重視している。「1．質実剛健の気風と勤労好愛の性格涵養をはかること　2．農業に関する技能を体得せしめ、農村好愛の精神の涵養を図ること　3．自治の精神を涵養し、国民性の陶冶を図ること[31]」であった。

生徒は「実習生」とよばれ、年齢16歳から19歳までの高等小学校を卒業した男子を1年間教育した。全員種畜場内に寄宿させ、自炊等の共同生活による塾風教育を実施した。実習以外の学科としては、農業・畜産関係の専門科目、修身のほか「農民道」と称する科目があり、課外として寄宿舎で修養会が開かれた。卒業生は愛知県追進会と称する同窓会を組織し、その総裁に山崎延吉（1873-1954）を仰いでいた。

香川県立農事講習所は、この愛知県の経験に基づき横尾惣三郎が新たな任地の香川県で創設したものであった。地元地域では農業学校の設置を要望し、その実現が図られようとしていたが、その計画が横尾によって農事講習所の設置に変更させられたのであった。関係者は以下のように証言している。

「初期の激烈な小作争議の鎮静のため香川県内務部長として赴任した横尾惣三郎は当時仲多度郡南部地方に進められていた農学校（予定経費8万円）に代えて自給自足の農学校、香川県立農事講習所を強引に設立した（経費4万円－故高篠村長田中正義氏による）[32]」

香川県は、平均耕作面積が小さく零細農家が多い一方、小作農比率が極めて高く、大正後期から初期に小作争議が頻発した。そうしたなか伏石事件などで知られるように、日本農民組合（日農）運動の全国的拠点ともなった。農業通の横尾惣三郎が内政部長に赴任したのは、実はそうした農民運動に対処するためであった。横尾は、持ち前の「自給自足の農学校」の構想をここ香川県で実現し、それを通して農民運動に対抗する農民の在り方を示そうとしたのであった。横尾は「自給自足の農学校」としてのこの農事講習所の意義を

以下のように述べている。

「自給自足の農学校は先生と生徒と一生懸命働いて、其生産物を売つた利益で、先生の俸給、小作料、其他学校の費用一切を支払う学校で、府県や町村から一文も金を出させないのである。四年四月から自分が香川県仲多度郡榎内村に香川県農事講習所を作つたが此れが日本で初めての自給自足の農学校で、もう約四年を経て居る。[33]」

2．香川県立農事講習所の教育・訓練

この講習所は県立であったが自給自足を標榜し、実際には相原言三郎（ことさぶろう）（1890-1985）による私塾のように運営されていた。教育目的は「農村中堅人物の養成」で、「教育精神」として「大和民族伝統の農民精神－質実剛健、勤勉努力の精神－[34]」の涵養を目指していた。敷地 1,300 坪・建物 745 坪（6 万円の寄付金で購入）で、田地・4 町 5 反余、畑地・1 町余、他に未開墾地 5 町余を有していた。入学資格は尋常小学校卒業の満 14 歳以上の男子で修業年限 2 年、教育課程は乙種農業学校に準じていた。

ただし、武道（剣道）を課し体操は皇国運動（やまとばたらき）と称する独特の体操を内容としていた。「やまとばたらき」は、東京帝国大学教授・法学者の筧克彦（1872-1961）が古神道に関わる研究蓄積を踏まえて 1910 年代に考案したとされる体操で、筧は当初これを当て字で「皇国運動」と表記したが，後に「日本体操」と表記した。「皇国精神（やまとだましい）」を簡単な身体の「運動（はたらき）」によって感得するというものであった[35]。

日課は、午前 5 時起床、5 時半から皇国運動・所歌合唱、6 時から食前実習、7 時から礼拝（二拝二拍手・君が代斉唱・教育勅語奉読・天皇陛下弥栄三唱）、7 時 10 分朝食で、学課は 8 時から開始となっている。午後は 1 時から日没まで実習、夕食後 9 時まで自習で、9 時に礼拝（二拝二拍手一拝）を終えて就寝となっている。生徒総数 40 数人で、農家出身者は約 7 割、卒業後は市町村吏員または農会技術員となる者が多かった。なお、卒業生を立本会（りっぽん）と称する OB 会に組織し、毎月会合して相互の連絡を図るとともに、「農産物の販売購買斡旋」、会報・農業出版物の刊行などを行っていた。1931 年度収支決算書によると予算規模は 1 万円強であり、養鶏や米・野菜の販売による収入によって、年間の人件費（所長 1 人・職員 2 人・嘱託 2 人・助手 2 人）4,800 円程度と借地料 1,000 円程度を賄っていることが知られる[36]。

ところで、農林省は 1932 年、農村恐慌に対処するため省内に農村更生部を新設し、農村更生運動を開始した。そして、1934 年には，農山漁村の中堅人物の養成を目的とした修練農場（通称「農民道場」）を各府県に創設することとした。そのため、修練農場設置の法的根拠として地方農事試験場及農事講習所規程を改正（1934 年 6 月 29 日）し、修練農場を農事講習所の一形態と位置づけ国庫補助の対象とした。修練農場は当初全国 20 か所に設置されたが、農事講習所を充当したものが多かった。香川県の農事講習所も 1934 年にこの修練農場に指定された。全国の修練農場は加藤完治の日本国民高等学校・内原訓練所と連携して 1936 年から満州移民送出を推進することとなった。

3．所長・相原言三郎

所長の相原言三郎は茨城県出身で盛岡高等農林学校を卒業し、日本国民高等学校でも学んだ経験を持っていた。相原は山崎延吉・加藤完治の推薦を受けて所長になったといわれており、皇国運動や剣道は相原所長が持ち込んだものであった。青年期は哲学・宗教・儒学などを学ぶ思索生活をおくっていたが、その思索に行き詰まった末、相原は「思想は力である」しかし「生活の上に表現し得るものでなければ力ではない」、「思想はそれが大衆をつかみ、実践をみちびく理論として」のみ力となるという考えを抱くようになった。観念的な思索生活を否定し、大衆の生活や実践こそ価値の源泉だと考えたのであった。その結果彼は「日本

精神の研究と実修」に向かった。「わたくしの生活は有閑者の悩みであり、概念の遊技である」との認識を深め、相原は「過去の総てのものを清算し」、加藤完治のもとで学ぶに至ったのであった[37]。彼はいささか偏屈なところがあった。岡林は「相原先生は非常に変わった方で、人の思うようには仲々返事をせられない方であった」と回想している。しかし、岡林は相原とは性格が合ったようで、「どこでウマが合ったのか大変お世話になった[38]」と述べている。

4．孝山塾の出発

岡林は5月から7月まで3か月間、相原のもとで学び、9月から檮原で塾の開設準備を進めた。まず教育機関の名称であるが、津野氏最後の当主・津野親忠の号「孝山」からとって孝山塾（檮原村立初瀬東小学校校長・中山一郎の案）と名付けることになった[39]。そして「孝山塾教育の大綱」を以下のように定めた。「建国の精神に立脚し、祖国愛、自然愛、職業愛に燃え、実社会の信頼に添い得べき確固たる精神と、健全たる身体と、誠実なる道義とを体得し、自己の生活に愉悦を感ずる、檮原村中堅人物を養成せむとす。」また、塾の目的は「学理並びに技術の指導により、農業経営の神髄を体得せしめ、実社会の信頼に添い得べき、確固たる精神と、健全たる身体と誠実なる道義を旨とする、真の皇国農民の養成を目的とす。[40]」と定めた。修業年限は1年であった。

当初校舎に予定された旧役場庁舎はまだ引き渡されず、村農会の繭乾燥場を借用して教室とし、寄宿舎は民家を借りた。1934年11月15日の仮入学の日には男子1人しかこなかった。村当局の肝いりではあったが、孝山塾は当初住民には不人気であったのである。開塾式までにはようやく男子4人・女子12人・計16人が入学した。塾は10月21日に県から設立認可され、開塾式は10月22日に片岡一亀県知事代理、県農会長、県立農業学校長などを招き、山崎延吉の記念講演を開催するなど盛大に行われた[41]。開塾式は塾の規模に比して不釣り合いなほど盛大であった。孝山塾はまずは県・村当局主導で実施されたのであった。

Ⅳ．青年学校「孝山塾」の教育実践

1．塾風教育の展開

孝山塾の一日は次のように始まった。「朝は五時起床。洗面の後は国旗を掲げて君が代の斉唱。続いて村是、誓い等当番制によって朗唱。直ちに女子二人は炊事当番に廻り、後は全員カルイコを負うて久礼谷へ薪負いに行く。日によっては車力を挽く。白谷を渡って杉林の中に入ってもまだ夜が明けぬので暗くて道もわからない。男子が杉の枯葉を集めて来て焚火を始める。その焚火を囲んで私はいろいろな話をする。女子は淋しいので、身体を寄せ合って私の話に聞き入る。やがて夜が白々と明け始め、色々な小鳥が四方で鳴き始めると、話も焚き火も打切りで、薪の所へ行き荷をして帰途につく。これが毎朝の日課であった。[42]」

薪は売って塾の生活費の補助とした。朝7時から8時まで朝食。8時より12時まで授業、午後は実習で女子は裁縫をした。夕方は5時から6時に夕食、それから9時まで自習で、9時に神宮遙拝と自宅の方角に向かって両親に就寝の挨拶をして消灯という一日であった。

当時女子生徒であった一人は、次のように回想している。「早朝、板木がカッチカッチと鳴りひびくと、ねむい目をこすりこすり、一斉に起床、炊事当番以外は食前作業の身支度、朝礼をうけて作業開始、終わってからの朝食のおいしかったこと、今では、当時の味を味わうことは、とても出来ません。[43]」

孝山塾の2年目の1935年度から全国で青年学校が発足した。檮原村には尋常小学校6校と尋常高等小学

校3校の計9校の小学校があったが、それらの小学校には皆農業補習学校が付設されており。それがすべて青年学校となった。そしてそれに加えて孝山塾が10校目の青年学校（単独設置）となった。生徒数も少なく塾風教育による修業年限1年の学校ではあったが、制度上青年学校とされたのであった。そして2年目には村役場が新築移転したので、その旧庁舎を校舎にしてようやく独立校舎を持つことができた。旧庁舎の1階を食堂兼教室とし2階を女子宿舎兼裁縫室とした。旧庁舎宿直室は男子宿舎に応接室は塾長室とした。岡林は1936年までここに寝泊まりして単身赴任で塾の教育に当たった。

２．男女共学・女子の裁縫教育

孝山塾は1934年11月から1942年3月まで続き、その間8回卒業生を送り出しているが、卒業者総数102人中75人が女子であった。女子は18歳から22歳までが中心で青年学校の研究科に該当した。塾生は男女共同に生活し共学で授業を行った。全村の青年学校で実施した植林も男女が共同で行った。「全村青年学校で村内の青年が集い、合宿し、烏帽子山へ杉を植えに行って、男女一対で植えたのでしたが、男の方は誰だったか、忘れてしまいました。夜のレクリエーションも面白く、青春の日の楽しい思い出です。[44]」と当時の女子生徒であった一人が回想している。

女子は裁縫技術の習得も目標の一つであった。1936年度から1938年度まで裁縫を主に担当した島崎志満亀（しまき）は、後に中等教員・専門学校教員の免許を取得したほどの優秀な教師で、女子の制服をデザインして仕立てたりして、「非常に垢ぬけのした感覚の教育[45]」をしたといわれている。塾長岡林の妻も「おば様」とよばれ、家族のように塾生の世話をした。女子生徒の一人は後に次のように回想している。「先生の教育は、理論もさることながら、全く、『ハート』にせまる教育でした。（中略）それで私達の心を引きつけ育てて下さいました。私はリクツぬきで先生御夫妻の後について行ったとしか考えられません。それから後の私は、まるで先生と奥様におんぶばかりしてきました。裁縫の材料がないと言えば奥様は、ご自分や、先生のものをほどいて洗い張りをして下さり、私に与えて下さいました。（中略）その頃の奥様は、まだお若くていられたはずなのに、あの温顔に表れている通り、おおらかな深い抱擁力で、いじけて我の強い私を、つつみこんで下さいました。その情愛の深さに頭が下がります。[46]」

岡林は、皇国主義に基づく厳格な自給自足型の香川県立農事講習所で学んだ。しかし、孝山塾では必ずしもこの農事講習所の方式が貫かれてはいない。少人数で女子生徒が多かったこともあろうが、家庭的な雰囲気の中で教育がなされていたようである。

３．修業年限の延長

中越義幸村長は孝山塾の修業年限を2年に延長することを構想した。檮原尋常高等小学校の高等科が三年制であったので、その第3学年を廃止して孝山塾に編入することを考えたのであった。この構想を岡林と檮原小学校の川邑栄一校長は支持したが、村会が反対した。その際、岡林は村会で、「本村には五千町歩の村有林がある。村営の発電所もある。この大いなる資産を安心して譲れる後継者が育成されているのか？この点をとくとよくお考え戴きたい。（中略）檮原村百年の大計たる後継者の育成をおろそかにすることは、賢明なる皆さんの取るべき道ではないのではないか。[47]」と訴えて、村会を説得したといわれている。村会においても村の後継者問題は極めて重要な課題として認識していたのであった。結果村費から校舎建築費1万4千円が計上され、新校舎の建築がなり、孝山塾は1939年4月から修業年限を2年に延長した。

その間しだいに孝山塾は檮原村青年学校の中軸として位置づいてきた。1936年から、村内の青年学校教員10人と小学校教員40人が青年学校の男女生徒140人ほどを引率して村有林を植林し、夜は全員孝山塾

に合宿して「座談会」を行う行事を継続した。それを「全村青年学校」と称し、部落間の壁を取り払い全村が一致協力する土台を作ることを目指した。その様子を当時の生徒の一人が以下のように回想している。

「私が参加した全村青年学校は十四年の早春であった。この日夜の明けぬうちに山を越え谷をわたり提燈の灯をたよりにかるいこを背に梼原校庭に集った青年に岡林先生が美事な髭を風邪にたなびかせながら壇上から村百年の計を立てる植林だ仲良くうえよと云われた言葉は今も耳にのこる。そして烏帽子山の頂上付近で男女校下を違えて一組となり女子は苗をくばり男子は植えていった。夜は講演で今に変わらぬ中越穂太郎先生の諧謔を交えた上手な話と明神敬彦先生の海ゆかばの万葉の古歌を堂々と歌われたのは印象が深い。こうした一夜を共にした行事を思い出す度に当時の村当局と青年達と一致協力して村づくりにはげんだ意気が今でもひしひしと胸に迫ってくる。[48]」

また 1939 年に高松市で開催された四国 4 県の青年教育研究大会で、岡林は高知県代表として孝山塾の経営と自己の教育信念を発表し全国的に注目された。そうしたなかで孝山塾は、檮原全村の青年教育において主導的な役割を担うようになっていった。

４．農業学校への転換

ところが、順調に発展するかに見えた孝山塾に、突然転機が訪れることになった。岡林廣喜代の転出であった。岡林は 1939 年 10 月に長男孝一をもうけたが、翌年の 8 月、突然腸重積によって死亡してしまった。本人作成の年譜には、「孝一死亡、ショックこれに優るものなし[49]」（八月）と記され、その上に黒い三角印が付されている。岡林の悲嘆がきわめて深かったことを物語っている。こうしたなかで、岡林はこの悲しみを吹っ切るように、高知県社会教育主事の誘いを受け転出することとなった。一方、中越村長も高知県の大政翼賛会組織部長となり高知市での仕事が増え、村長を西村繁太郎に交代した。そんなことから孝山塾の前途が危ぶまれるようになった。

檮原村では熟慮した結果、孝山塾を農業学校として存続発展させる道を模索することとした。しかし、中越義幸はそれが極めて困難な途であったことを以下のように記している。「早速文部省へ甲種農学校設立認可の申請書を提出し私がたびたび上京する機会も多かったので、その筋への強い交渉をしたが、村立の甲種農学校は、いまだかつて一校も例がなく維持上、経費等幾多の難関が多いとして、なかなか認可される見込みがなかった。[50]」

しかし、檮原村の村有林が国と官行造林契約を結び、村の経済状態も優良であることなど、村立での農業学校経営に問題がないことなどを粘り強く文部省に説明し、ようやく 1942 年 1 月 29 日に檮原村立農林学校（甲種程度の農業学校）の設立が認可された[51]。そして同年 4 月 17 日始業式、5 月 17 日開校式を挙げた。組織は、男子が修業年限 3 年・生徒総定員 90 人、女子が修業年限 2 年・生徒総定員 60 人、入学資格は国民学校高等科卒業であった。全寮制・男女共学の珍しい村立実業学校の誕生であった。さらに翌 1943 年度からは中等学校令公布により中等学校の一種となった。他方、檮原村立孝山塾青年学校は 1943 年 5 月 13 日に廃止（認可）された。

V．岡林（安本）廣喜代の経歴と思想

1．生い立ち

次に、孝山塾の塾長（校長）・岡林廣喜代の経歴・教育観について考察していきたい。廣喜代は、1901 年、吾川郡富岡村の岡林家に生まれた。尋常小学校卒業後、高知県立第一中学校を受験したが合格せず、役場用務員（使丁）として勤務し、家業の農業を手伝っていた。当時四国では村相撲が盛んで、廣喜代は 10 代後半には村相撲の人気力士として名を馳せた。20 歳になる頃、教員への道を歩むことを志し、1922（大正 11）年高岡郡立準教員養成所（現・須崎市）に入所した。そしてこの年の 11 月、21 歳で安本シゲ子（16 歳）と結婚した（安本家に入籍することになっていたが、廣喜代はその後しばらく入籍せず岡林姓を名乗っていた）。

1923 年、尋常小学校本科准教員免許状を取得して卒業、高岡郡の多ノ郷第一小学校教員（准訓導）となった。翌年、尋常小学校本科正教員免許の資格を得、同郡佐川小学校へ転任した。しかし、岡林は唱歌や図画が不得意なことから小学校教員に不向きなことを自覚し、実業補習学校教員へ転身することを考えた。当時高知県は長岡郡長岡村（現・南国市）の県立農業学校に県立農業補習学校教員養成所（1923 年－1934 年）を付設していた。岡林はこの教員養成所を 1925 年に受験し、合格・入所することとなった[52]。その時の養成所主任が後に岡林が深い関係を持つようになった片岡一亀であった。

2．高知県の実業補習学校拡充政策

その間、高知県は実業補習教育の充実を図るため、1926 年 7 月実業補習学校費補助規程を制定し実業補習学校教員の俸給の三分の二を県費補助することとし、1931 年 4 月 30 日に実業補習学校規程施行細則を制定し実業補習学校の一層の拡充を図った。すなわち、「職業陶冶ト公民教育ノ徹底ヲ目的トシ、敢ヘテ小学校教科ノ補習ニ止マルモノニ非ス」と、小学校の補習のイメージを払拭し、職業教育と公民教育を目的とすることを明確化した。そのため実業補習学校の名称を「実業公民学校」と称するようにし、修業年限を初等科・中等科各２年の上に高等科 2 年ないし 4 年（女子は 1 年ないし 2 年）とした[53]。高等科が通常の制度として新たに設けられ、実質的な修業年限延長をもたらし、実業補習学校は小学校とは別の青年教育機関としての色彩を強めた。また修業年限の延長によって、実業公民学校のうち青年訓練所に充当されるものも増加し、当時高知県では「実業補習学校が実業公民学校として飛躍的に拡充されるに至った[54]」といわれている。

岡林は農業補習学校教員養成所（1926 年度から修業年限 2 年となった）で 2 年間修学し、1927 年卒業後、吾川郡の伊野農業補習学校に、1931 年からは同郡弘岡実業公民学校に、それぞれ教諭として勤務した。そして前述したように 1934 年 4 月に檮原村に赴任した。岡林の青年教育論に注目した片岡一亀の推薦であった。片岡はその時県視学となっていた。

3．岡林の青年教育論

岡林は、1927 年 2 月 1 日、青年教育をテーマにして農業補習学校教員養成所の卒業論文をまとめている。そこではまず、信念のある青年は行動も安定し「自ら求めて技術を身に付ける」ことができる。したがって何より青年教育は「精神の錬磨に重点をおく[55]」ことが必要であるとしている。しかしながら、青年教育は中等教育や小学校教育に比して十分な経費が支出されておらず、農村青年教育は特に恵まれない地位に置かれている。それを改善することが必要であるが、そのためには「補習教育を義務制にし、雇用主にも教育を授ける義務を負わせるべき[56]」であると主張している。補習教育の義務制を求めているのである。

次にその青年教育の内容としては、まずは公民教育と職業教育としながら、目標とする人間像として「基盤を国家社会に置き、土地愛、祖国愛、職業愛に立脚した人生観を確立し、質実剛健にして、うるおいのある人間[57]」を掲げている。そして「郷土に即した教育」とすること、「青年の特質」すなわち発達心理的な特徴を理解して指導することなどを、教育上留意すべき点として挙げている。さらに農村教育の問題点としては、小学校教育が「知育主義」であることと、農村青年が「少しでも楽で、華やかな方へと心をひかれ」、精神が不安定になりがちなことを指摘し、そのために農村青年には「精神教育」が必要であると強調している。

さらに教育内容としては職業教育や公民教育が重要であるが、むしろ「青年教育の方法」が鍵になると述べている。すなわち青年の自発性を引き出し、そこに依拠して教育することが不可欠であるとしている。岡林は「すべての面で、青年自らの自発的意欲こそ、最も尊重せられ、活用されなければならぬ。講習会、授業、文庫等も、青年達の欲求によらなければ充実しない。故に青年教育者は、如何にして彼らの意欲を高め、充実させるかの手だてを研究しなければならぬ。[58]」と述べている。青年期の教育を有効にするため、何より青年の意欲に基づく教育方法の必要性を強く認識しているのである。それとともに、そうした青年の意欲や認識の深化を図るため、「百聞は一見に如かず。百見は一試に如かず」の格言を示しながら、「体験教育」の必要性を強調している。

岡林の青年教育論は、「青年期の発見」という当時の青年心理学の流れに依拠しながら、児童中心主義や、労作教育・生活教育といった新教育の思潮が豊かに展開されている。単に皇国主義的・全体主義的な勤労教育を主張するものではない。孝山塾の元生徒の多くが語っているように、孝山塾の教育が家庭的で人間味豊かなものであったことは、こうした岡林廣喜代の教育思想に依るものであったように思われる。

なお、岡林（安本）廣喜代は、戦時中、高知県の大政翼賛会実践部長となり、県の義勇隊動員部長を勤めた。そのため戦後は1951年まで公職追放となった。しかし追放解除後、1958年に生まれ故郷の吾川郡池川町の教育長となった。ただし学校教育の現場には二度と戻らず、自分の子どもを育てるように、亡くした二人の子の命を慈しむように、日々植林に精を出し、地域の山林や学校林の整備など緑化事業に熱心に取り組んだ。そして1981年12月に満80歳で亡くなった[59]。

まとめにかえて ―塾風教育機関の意義―

本論文で見たように、岡林が相原言三郎のもとで修行したにもかかわらず、孝山塾は必ずしも皇国主義的あるいは軍国主義的な思想に基づいて運営されていたわけではない。何よりも堅実な村の後継者を養成するための教育機関であった。塾長である岡林廣喜代の教育思想も、児童中心主義的な労作教育や生活教育の思想を反映した青年教育思想が柱となっていた。むしろ青年の自主性を尊重した少人数の家庭的な教育機関である点に特色があった。

ところで、社会教育者としても知られる作家の下村湖人は、近代公教育は「制度中心の教育」となり、「生活的、体験的、情緒的」な面が欠け、「被教育者の一人一人の魂」から、「その自立性と創造性とを奪い去った[60]」と述べ、それを克服するために、「塾風教育」が重要であることを主張している。「塾風教育」は「多種多様なる独自の教育精神が、絶えず独自の境地を開拓しつつ、互いに切磋琢磨するところに、制度による教育の画一化の弊が矯正され、国家の教育が全体として豊かな内容を持つに」[61] 至ると論じている。この湖人の言を借りれば、孝山塾のような地域に根ざした小さな塾が全国津々浦々に展開することこそ、「教

育が全体として豊かな内容を持つ」ことにつながり、そのことが「一人一人の魂」に「自立性と創造性」を取り戻す手立てになるのであろう。宮坂広作のいう「近代の論理」を越えるものとはこういうことをいうのではなかろうか。いわば、ドイツの新教育運動家のヘルマン・リーツ（Hermann Lietz：1868 年－1919 年）による田園教育塾に比すこともできるのではなかろうか。

さてその後孝山塾の伝統はどうなったのであろうか。その流れは決してついえることなく今も生きているのである。地域に根ざした家庭的な教育機関という特徴は、現在も高知県立檮原高等学校に継承されている。村立檮原農林学校は戦後改革期に高等学校として転換・存続できるか否か危惧されたが、中越義幸をはじめとする村の政治家の力や片岡一亀など県当局の援助があり、いったん新制発足前の旧制度中に県立移管され県立檮原農業学校となった後、新制度の県立農林高等学校として転換されることになった。1949 年 9 月からは普通科・農業科・別科（被服科）を置く総合制の檮原高等学校となり[62]、2001 年度から地元の中学校と連携した中高一貫教育校として檮原の地に根ざした教育を展開している。「孝山寮」と称する寄宿舎を持ち、家庭的な雰囲気で寮内補習教育も実施し、高知県全域から生徒を集めている。2018 年度現在、 1 学年 80 人定員という少人数ながら農業、家庭・情報、文理の 3 コースを持ち、いわば塾的な人間味豊かな教育が行われている[63]。檮原高等学校はこうした独自の取り組みをしながら、孝山塾以来の青年教育の伝統を継承・発展させようとしている。

注

1） 協調会編『農村に於ける塾風教育』協調会、1934 年、緒言 pp.1-2。
2） 小野武夫『村塾教育の時代的使命』財団法人啓明会紀要第 16 号、1934 年 6 月、p.9。
3）4） 同上書 p.10。
5） 日本教育社会学会編『教育社会学辞典』1967 年、東洋館出版社、p.557。
6） 仲新編『日本近代教育史事典』1971 年、平凡社、「農村教育」の項目、碓井雅久執筆。
7） 浜田陽太郎『近代日本農民教育の系譜』東洋館出版社、1973 年、p.50。
8） 宮坂広作「日本農本主義の教育：思想と実践」『東京大学教育学部紀要』第 29 巻、1990 年。のち『近代日本の社会教育』（宮坂広作著作集 1 、明石書店、1994 年）の第 4 章「日本農本主義の教育：思想と実践」に収録。同書p.266 より引用。
9） 檮原町編纂委員会編『檮原町史』檮原町発行、1968 年。
10） 司馬遼太郎が『週刊朝日』で 1985（昭和 60）年 12 月から 86（昭和 61）年 2 月まで連載した「檮原街道（脱藩のみち）」。のち司馬『街道をゆく』二十七、朝日新聞社、1986 年 6 月、p.243、所収。
11） 前掲『檮原町史』による。
12）13）14） 財団法人中央教化団体連合会編『昭和十年度指定　教化町村施設一覧』非売品、1936 年 10 月、の「高知県高岡郡檮原村（昭和十一年七月調）」p.330。
15）16）17） 前掲『檮原町史』による。
18） 財団法人中央教化団体連合会編『教化町村概況』1937 年 7 月。
19） 中央教化団体連合会『財団法人中央教化団体連合会要覧 昭和 13 年』中央教化団体連合会発行、1938 年による。
20） 中央教化団体連合会『教化町村指導要綱』教化町村叢書：第 1 輯、中央教化団体連合会発行、1935 年、P.3 。
21）22） 同上書 p.6。
23） 同上書 pp.4-5。
24）『高知県人名事典　新版』（高知新聞社、1999 年 9 月）、「中越義幸氏を偲んで」（『檮原村広報』1978 年 4 月 1 日）および「素顔　中越義幸氏」（『檮原村広報』1961 年 7 月 20 日）による。

25）前掲『昭和十年度指定　教化町村施設一覧』p.334。
26）同上書 p.335。
27）同上書 p.332。
28）安本広喜代『喜　歩みし跡 77』非売品、1973 年 8 月、p.123。
29）30）同上書 p.124。
31）前掲『農村に於ける塾風教育』p.210。
32）杉村重信「農事講習所回顧」香川県立農事講習所立本同窓会編集『回想　講習所生活　香川県立農事講習所外史』立本同窓会発行、1977 年、p.36。
33）横尾惣三郎『農民読本』農村研究会、1933 年、p.105。
34）前掲『農村に於ける塾風教育』p.220。
35）筧克彦『皇国運動』（博文館、1934 年）および中道豪一「『日本体操』の理論と実践」（『明治聖徳記念学会紀要』第 51 号、2014 年）による。
36）前掲『農村に於ける塾風教育』pp.220-226。
37）相原言三郎『勤労を中心とせる自給自足の農民教育』香川県立農事講習所内立本刊行会、1933 年 8 月、「自序」による。
38）中越義幸「県立梼原高校が生れるまで」高知県立梼原高等学校同窓会五十周年記念誌編集委員会編『創立五十周年記念誌』県立梼原高等学校同窓会発行、1984 年 11 月（「昭和 59 年度会員名簿」付）、p.69、所収。前掲『喜　歩みし跡 77』p.125。
39）前掲『喜　歩みし跡 77』p.124。
40）同上書 p.138。
41）前掲「県立梼原高校が生れるまで」p.69。
42）前掲『喜　歩みし跡 77』p.127。
43）同上書 p.179。
44）同上書 p.181。
45）同上書 p.129。
46）同上書 p.187。
47）同上書 p.150。
48）「思い出の人々　その四　松原校　真辺利久」『檮原村広報』1973 年 3 月 1 日。
49）前掲『喜　歩みし跡 77』p.283。
50）前掲「県立梼原高校が生れるまで」p.69。
51）『官報』第 4517 号、1942 年 1 月 31 日。
52）前掲『喜　歩みし跡 77』pp.96-100。
53）高知県教育史編集委員会編『近代高知県教育史』高知県教育研究所、1964 年 3 月、p.190。
54）同上書 p.191。
55）前掲『喜　歩みし跡 77』p.110。
56）57）同上書 p.111。
58）同上書 p.117。
59）安本廣喜代の長女・宏子さんによる。
60）下村湖人「塾風教育と共同生活訓練」（1940 年執筆）『下村湖人全集』第 7 巻、池田書店、1965 年、p.303。
61）同上書 p.323。
62）高知県立梼原高等学校同窓会五十周年記念誌編集委員会編『創立五十周年記念誌』県立梼原高等学校同窓会発行、1984 年 11 月（「昭和 59 年度会員名簿」付）の「学校沿革」p.58。
63）高知県立梼原高等学校「平成 30 年度　学校案内」2018 年。